

ある日、お昼の片づけが済んでいつものようにみんなで遊んでいると寮母さんがやってきて、7歳になるけんちゃんが呼ばれた。「お母さんがやってきたので、急いで面会室に行くように」と言った。私たちは、「こんな、めったにないことを聞きつけた。他人事であってもそりゃあえらいこっちゃなあ」とおおさわぎになって「見物に行くことにしよう」と、こっそりけんちゃんの後ろをついていくことにした。

入り江に沿って野道を歩いていくと、赤い瓦屋根の建物があった。窓が開けっぱなしなので、外から部屋の中が丸見えになっていて、療養所と社会を分断し逃げ出せないように置かれている境界線の木机が見えている。そして、長つびろい机の真ん中にこちら側に向かってぼつねんと一人座っている女の人がいた。近くまで来るとけんちゃんは喜んでおかあさんのところに駆け寄って行き、けんちゃんはまだ小さいので、向こう側に行けないように置かれている机の下をあつという間に潜り抜け、赤ちゃんのようにお母さんに抱きついて甘えているのだ。

ほどなく二人で過ぐすと面会時間に限りがきたようで、守衛さんが何やら話しかけてきた。向こう側に戻るのには、瀬溝（せみぞ）の渡し船が無くならないまだ陽が高いうちに帰らなければならず、船着き場まで一緒に行くようにお母さんは守衛さんをお願いをしたのだが、途中までしか許されなかった。

仕方なしに、お母さんはけんちゃんの手を引いて木尾湾（きおわん）の奥にある細道、もと来た道を歩いて行った。こども達は、面会室の裏の山側を先回りして林を抜け、二人の後ろ姿を追いかけた。

やがて、木尾湾までやって来ると、子ども達が来た道と園の方から下ってくる坂道と瀬溝に向かう道の三叉路の境に一本の白い杭が打ってある。

そこには、「これより先、無菌地帯。患者立ち入るべからず」と書かれた標識が立っていた。ここから先は病気のけんちゃんが入って行くことはできないのだ。追いかけてきた子どもたちもここで立ち止まるしかなかった。

しかし、けんちゃんは一瞬とどまりかけたが帰っていくお母さんを追っかけて走って行くのだった。だんだん細くなっていく道でお母さんは足を止め、泣きじゃくっているけんちゃんを抱きかかえると、また少し歩き今度はぎゅっと抱きしめて、また歩き、道が入り江に沿って曲がったところまで来ると、もう一度立ち止まってけんちゃんを懐に抱きしめ、赤ちゃんをあやすように「高い高い」をして見せた。

そしてまた、こちらに背中を向けると瀬溝の方角を指して無菌地帯の道を足早に去って行った。するとけんちゃんはまた泣きながら「お母ちゃん。お母ちゃん」と入ってはいけないところまで追いかけていくのだった。

お母さんは急ぐ足を止め振り返って、たまりかねたようにけんちゃんを抱き上げ「また来るからね」となぐさめ、小走りに道を急いだ。

それでもけんちゃんは追いかけた。すると目の前に赤い屋根の本館と守衛所が見えてきたのだった。ここまで来ると、職員に見つかって叱られるのめかなわんし、けんちゃんも疲れたのか、あきらめたのか足を止め、お母さんからおみやげにもらったお菓子の袋をしっかりと胸に抱きかかえ、「お母ちゃん、お母ちゃん」と、遠ざかって行くお母さんの後ろ姿を見つめ泣きじゃくっていた。

やがてけんちゃんのお母さんは守衛所の建物の窓口に着くと何か用事を足して、船に乗り遅れないように瀬溝の渡しにある船着き場に向かうと、遠くに見えていたお母さんの姿は、足元からだんだんと小さくなってやがて見えなくなってしまうた。

けんちゃんはその場所にうずくまって、「お母ちゃん」と叫びながら泣いていたが、しばらくすると、入り江からザブーンと波の音が聞こえてきた。呼べど泣けども返事はなく、なんの気配も感じられない。さっきまでそこに居た筈のお母ちゃんのぬくもりまでも海風に連れ去られてしまったのか、そこにはただ赤土の崖と植林した松林の景色だけが残されていたのだった。